



TOHOKU UNIVERSITY  
OF ART & DESIGN

# Fontaine

フンテーヌとは、フランス語で「泉」のことです。泉は、都市では交流や癒しの場所となり、砂漠では生命を支える場所となります。私たちは、この冊子を、芸術と工学を融合するTUADの知恵と技術があふれる泉とし、地域の力、企業の手、そして高校生の手となるよう、コミュニケーションを深めていきたいと考えています。

No.26

2001.10.10

東北芸術工科大学  
コミュニティ



TUAD



フローズアップ

東北に、日本に、世界に発信する教授陣 ③

## 村木志伸 歴史遺産学科専任講師

いま、村木講師は、山形県米沢市から出土した古志田東遺跡の墨書土器研究に没頭しています。

遺跡の出土品の中で、文字の書かれたものは「出土文字資料」と呼ばれ、漆紙文書、木簡、金石文、文字瓦、墨書土器などがあり、古代社会を解明するための重要な資料とされています。その中で、土器に墨や朱で文字が書かれたものが墨書土器。主として奈良～平安時代の遺跡で多数見られるもので、東北でも各地で出土しています。米沢市で発掘された古志田東遺跡の墨書土器は442点、山形県内でも1、2位を争う出土数です。

かすれてしまって判読しにくい文字や、樹脂状の物質で隠されている文字は、赤外線テレビカメラなどを使って調べた結果、記号と思われる「𐄂(138点)」のほか、数十種類の単語文字を解読することができました。

たとえば「木(66点)」「東(もしくは東・15点)」「山田(12点)」「達」「吉成」「欠」「吉」「生」「布」「伍万」「福」などですが、村木講師の研究は、それらの文字は誰が、どのような目的で土器に書き記したのかという基本的な解明から始められました。

「山田」は地名、「達」「吉成」「吉」「生」「福」などは吉祥を願って書かれ、祭祀の場で使われたものとも考えられる。しかし、それなら「木」や「東(もしくは東)」は、何のためのものなのか?…解明されたと思われていたことが実はまだまだ研究の余地の多いものであることがわかり、村木講師は、当時の庶民の信仰や精神生活など、全体像を調べなければ解明できないと考えるに至りました。その研究は、土器がつくれ、使われて廃棄されるまで、どのようなサイクルの中で利用され、どの段階で文字が書かれたのか、土器の

一生を辿る地道な作業によって深められているのです。

「考古学や文献史学は研究が一步進めば、その先にさらに不明なものが見えてくる…だから、研究者にとって無尽蔵の研究対象があり自分から始まる主題を見つけることができるんです。」と、さらにその目は墨書土器以外のテーマにも向けられています。

### Muraki Shinobu

1972年、東京都生まれ。お茶の水女子大学で文献史学を専攻し、國學院大学で『古代墨書土器の考古学的研究』により博士号を取得。歴史遺産学科では、歴史学、考古学を担当。研究業績として、『都衛正倉の研究』、『墨書土器にみえる諸痕跡について』などがある。



# 開学10周年。建学の原点に立ち返って 日本の課題、地域の期待に応えていくために

1992年、「わが大学の前に道はなし。あるは、歴史の実験のみ -。」の志で開学した東北芸術工科大学。2000年には、「100年経っても新しい大学」をキャッチフレーズとして将来構想を発表し、大学の基盤を確かなものとしてきました。そして10周年。記念事業として取り組んだ施設の整備も完成し、2001年10月2日の記念式典や能舞台の柿落しを通して内外に披露し、21世紀の課題を担い、地域の期待に応えていく意欲を示しました。

## 日本の本当の姿を取りもどすという志 その心が能舞台という形になった

大学は、どのようにして21世紀の課題と地域の期待に応えていくのか……。いますべての大学に、このような問い

が突きつけられています。本学は、10周年記念事業として取り組んだ施設整備計画の中に、その答えを込めました。大学の施設としては有数の本格的な能舞台を建設し、図書館と学生会館の改善、教員研究棟の新設を行いま

した。施設は、それだけでは単なるコンクリートの塊であり、箱でしかありません。どのような意義を与え、活用するか。本学理事長は、大学をとりまく状況や時代背景に触れながら、能舞台を中心に次のように語っています。



理事長 徳山詳直 Tokuyama Shochoku

この東北芸術工科大学は、開学のときから恐ろしいほど大きな志をもって出発したのですが、なぜにかくもない力をふりしぼって力んでいるのかという理由を一言申し上げたいのです。

日本は国際化されなければならぬと、よく言われます。私はそれを逆説的にとって、日本の国のために、日本のいわば民族のために、本当の日本の姿といったものをもう一度問い直し、取りもどそう、それによって日本はどう

世界の中で生きていくのかが見えてくるのではないかと考えました。それが、この大学の原点であり、志であります。たとえばこの能舞台ですが、10年かかってその懸案が実現いたしました。司馬遼太郎さんが「この国のかたち」という言葉を使っていますが、私はその言葉をそのまま使わせていただきたいと思っています。この能舞台は、この大学が本当に輝いている大学になるために、魂を磨いていくために、そうありたいと願っていたことが形になったものなのです。能舞台の切妻屋根を見た学生は、心が洗われるような気持ちになるでしょう。この大学の志が、魂が、心が、この能舞台という形になって現われた、新しい設備となって現われたということをご理解いただきたいと思っています。

2001年のいま完成したことは、「時あたかも」といった感じでしょうか。20世紀は、よい意味でも、悪い意味でも、とてつもない時代でした。それを深く反省するところから21世紀が始まると思っていますが、私はこの大学でそういうことを考える学生を育てたいと思います。たとえば、お地蔵さんの前を通るとふと手を合わせたくありませんか。つまり、何が一番大切なのか、みんなの魂、心が大事なのだということをお伝えしたいのです。

能舞台とは、本来、神が宿る場所であり、人間の魂の安らぎの場所であるという由来をもっています。その意味で私たちは、最初から「魂」を出羽三山に向けることにし、この能舞台を出羽三山に向かってたたずむものとししました。



本格的な能舞台「伝統館」。魂の拠り所とも考えられている出羽三山に正面が向き合うように建てられています。

10周年記念事業として  
「スウェーデン・デザイン  
の現在」も開催

開学10周年記念事業の一環として、10月12日から26日まで、本学ギャラリーにおいて「スウェーデン・デザインの現在」を開催。本学では、スウェーデン国立芸術工芸デザイン大学(コンストファック)との国際交流を行っていますが、その関係からスウェーデン大使館の協力を得て、東京における「スウェーデン祭」と連動して、スウェーデンの最先端の家具を中心とした展示や、スウェーデンを代表するデザイナーの講演会などを企画しました。また、コンストファックと本学との交換留学制度によって、本学で学んでいるスウェーデン学生の作品もあわせて展示。その後は、栗津潔作品展、東南アジアの漆展なども予定しています。

教育組織や入試制度の改革の  
延長線上で施設拡充

本学は、開学以来、芸術とデザインを志す学生が、その意欲を実現する場を見つけ、才能を磨くことができるよう、研究と学習の環境を整え、教育組織や入試制度の改革に取り組んできました。たとえば教育組織に関しては、2001年には芸術学部「美術史・文化財保存修復学科」と「歴史遺産学科」を新設し、デザイン工学部の情報デザイン学科を「情報デザイン学系」と「未来デザイン学系」に改編しました。これによって、1学年で50名余の増員となっています。また入試制度においては、AO(アドミッション・オフィス)型入試を取り入れ、じっくりと時間をかけ、受験生と膝を突き合わせてその人の意欲や才能のきらめきを見いだそうとしています。

図書館と学生会館の改善、教員研究棟の新設は、その延長線上で取り組んだものであり、学長は次のように説明しています。



学長 會田雄亮 Aita Yusuke

私たちは、「将来構想」を考える中で大学の規模としてどのくらいの学生数が適切なのかを議論したとき、少なくとも2000人の学生が必要ではないかという答えを得ていました。学科編成によって本学は、限りなく適正な規模に近づいていると言えるでしょう。

その中で、どうしたら教師と学生がより密接な教育環境を創り出せるか、また、どうしたら学生がより快適で知的な空間を共有することができるか。芸術とデザインを専門とする大学にふさわしい空間の実現に向けて、学生会館と図書館を大幅に改修し、教員研究棟を新設したのです。



図書館は、開架スペースやAVコーナーを拡大したうえ、ギャラリー「ガレリア・ノルド」や多目的ホール「スタジオ144」などのパブリックスペースも設置しました。



学生の課外活動を支援する学生会館は、カフェや、大型プリントが可能な出力センターを新設し、学生会室、クラブ室、スタジオなどを設置しました。



学生と教員の距離を短くし、親しくふれあうことができるように、実習棟に隣接して5つの教員研究棟を新設。個々の研究室も、気軽に学生が入り出できるように、開放的で、広い造りになっています。



新研究棟は外観、色彩に統一性をもたせただけでなく、各学科・コースにふさわしい研究棟であるよう採光や内部構造に特徴を持たせました。たとえば、教員や学生の作品を展示するギャラリーを設けたのも、その一例です。

## 総合研究センター

3

「アート・イン・ホスピタル構想」  
事業への取り組みも

山形県上市市の医療法人社団みゆき会「みゆき会病院」の院内にオブジェを置いて療養環境の向上をはかる「アート・イン・ホスピタル構想」事業に取り組みました。この構想は、病院の新施設建設・改装にともない、医療技術はもちろん、心のケアも重視し、患者の精神的な安定を考えて、みゆき会が導入を検討、今年3月までに光のオブジェ、陶製のタペストリーなど作品9点を設置しました(写真)制作にあたったのは、美術科の山中良子教授と佐々木理一講師。



## 日本のどの大学よりも 大学としての役割を果たし続けよう

10月2日、関係各位に10年間の支援に対する感謝を示すと同時に、新しい施設を披露するため、開学10周年記念式典をはさんで、施設見学会と記者会見、そして能舞台「伝統館」の柿落としとレセプションを実施しました。

### 記者見学会

時間 14:30 ~ 15:30

会場 能舞台、研究棟、学生会館、  
図書館

### 記者会見

時間 15:45 ~ 16:15

会場 図書館2Fスタジオ144



図書館2Fスタジオ144で開かれた記者会見。施設拡充の「目的」と「今後の活用」に質疑が集中しました。

### 開学10周年記念式典

時間 17:00 ~ 17:30

会場 能舞台「伝統館」

#### 式次第

- ・ 常務理事口上
- ・ 理事長式辞
- ・ 山形県知事祝辞
- ・ 山形市長祝辞
- ・ 感謝状贈呈
- ・ 鬼瓦除幕

### 能舞台「伝統館」柿落とし

時間 17:45 ~ 18:55

会場 能舞台「伝統館」

### レセプション

時間 19:15 ~ 20:30

会場 学生会館

施設見学会後の記者会見では、理事長、学長による施設計画の説明の後、主として能舞台の「建設の目的」と「今後の活用」についてに質疑が集中。能舞台の活用については、理事長が「能舞台は能を舞うためだけにつくったものではありません。大学の心を形にし、日本人の魂を形にしていくためには、ファッションショーや学生の演劇活動であってもよいと考えています。笛や尺八でも、日本舞踊でもよい。日本人の心に響くさまざまなことを、この舞台で実現していけばよいのだと思っています。」と答えています。

記念式典では、常務理事が、10年の歩みをふりかえり、『東北芸術工科大学設立の宣言』を読み上げ、「北の大地から日本を照らすもうひとつの北極星たらんことを願って」と高らかにうたいあげました。そして理事長がただ一言、「本学は、日本のどの大学よりも、大学としての役割を果たしつづけるだろうと思っています。」との自負と決意を披露。そのあとにつづく祝辞では、山形県知事、山形市長により、山形から全国へ発信できる芸術系大学となったことを誇りに思っていること、今後より一層地域の課題に応え、県民に開かれた大学となることに強い期待を持っていることなどが語られました。



記念式典で、高橋山形県知事より祝辞。



記念式典で、吉村山形市長より祝辞。



記念式典の最後は、理事長、鈴木盛也氏(能舞台の設計者)保護者会会長および学生会長による、能舞台鬼瓦除幕。本学芸術学部長・峯田義郎教授の作品が夜空に浮かびあがりました。

本格の作品にふれる感動  
柿落しの上演から明日を考える

記念式典につづく能舞台の柿落しは、翁・観世榮夫、千歳・清水寛二、三番叟・野村与十郎ほかの出演者による『翁』。

この曲目は、能のルーツともいわれるもので、儀式性が濃く、正月や祝い事などの際に演じられることが多いもの。天下泰平、国家安穩、五穀豊穰を祈念する能で、他の能のような物語性を持たず、能が室町時代に観阿弥(1333～1384)・世阿弥(1363～1443)によって大成される以前の様式を残しています。これを、観世流の正統を継ぐ観世榮夫氏(故・人間国宝観世鍔之丞氏兄)が翁を演じて上演することとなったのです。

冷たい風が吹き、雨も混じる劇的な条件の中での上演となりましたが、まさに入神。本格的な環境と本格的な芸が一体化すれば、どれほど大きな感動を与えるものかが実感される舞台となりました。

今後、本学に集う学生・教員が一丸となって知恵を出し、力を合わせていけば、日常的に活用し、柿落しに負けないプログラムを地域に提供していくこともむずかしいことではないでしょう。



能舞台の柿落しは『翁』の上演。一同整列して、「橋掛かり」と呼ばれる廊下をゆるりゆるりと歩いて舞台上に登場し、笛、小鼓、地謡に合わせて千歳(ツレ)、翁(シテ)・三番叟(狂言)の順で舞を披露します。翁は、面なしと、福来作(室町時代)の翁面をつけての2度、荘厳な舞を披露します。



千歳は、翁の露払いの役割を担う者。面なしで、すがすがしい舞を舞います。



三番叟は、勇壮でリズムミカルな舞。足拍子を踏む力強い舞と、面をつけての種蒔きの舞を舞いました。

東北文化研究センター

3

「高校生のための地域学ゼミナール」を開催

最近、全国各地で地域学が盛んになっています。本学が提唱する「東北学」をはじめ、「山形学」、「京都学」など、地名に学をつけた「学」を耳にした方も多いのではないのでしょうか。本学東北文化研究センターおよび歴史遺産学科では、オープンキャンパス2の一環として、9月15日、16日の両日、「高校生のための地域学ゼミナール」を開催しました。このゼミナールは、考古、歴史、民俗などの視点から地域学をわかりやすく紹介しようというもので、高校生・一般の方を含め、のべ約260名の方に参加をいただきました。参加後のアンケートでは、民俗学や歴史遺産への感心が高まったとの声が多数寄せられました。



文化財保存修復研究センター

1

設立記念にイベントを開催

文化財保存修復研究センターの設立を記念し、9月25日～29日の日程で、ドイツ・ドレスデン美術大学のヴァインフリート・ハイパー教授による「カンヴァス画の保存修復におけるTear-Repair-Technique」と題した公開講演会およびワークショップが開催されました。センターでは文化財の保存修復事業はもちろん、このような教育・普及も大きな柱であり、また海外の保存修復家との交流も重要な活動といえます。絵画保存修復家や美術館学芸員など学外からも20数名が参加し、ハイパー先生の熱心な講演を傾聴し、また顕微鏡下での実技指導に真剣に取り組みました。

松田泰典(文化財保存修復研究センター長)



# 大きいものを創るために選ばれた鉄



## 『愛玩』(H210 × W210 × D90cm)

「たぶん、大学院を修了しても就職はしないでしょう。いる場所を決めてしまうと、できなくなってしまうと思うので、場所を固定したくないんです...」という茂木くん。その生き方が、素材選びにも、作品づくりにも反映されているようです。

茂木くんにとって、鉄は錆びることによって、熱を加えることによって、そしてペイントすることによって色を変え、表情を出すことができるもの。また、木や石が原則として削っていく素材だとすると、鉄は溶接し、つけ加えていく素材。だから、創っていくうちに色を変え、その時どきの気持

ちに合わせて大きくしていくことができる鉄を選んだのだそうです。

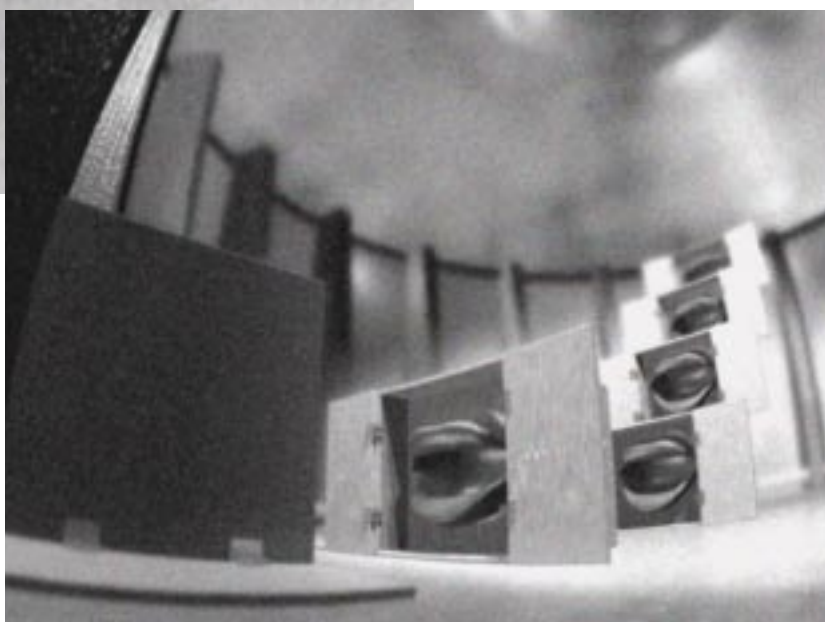
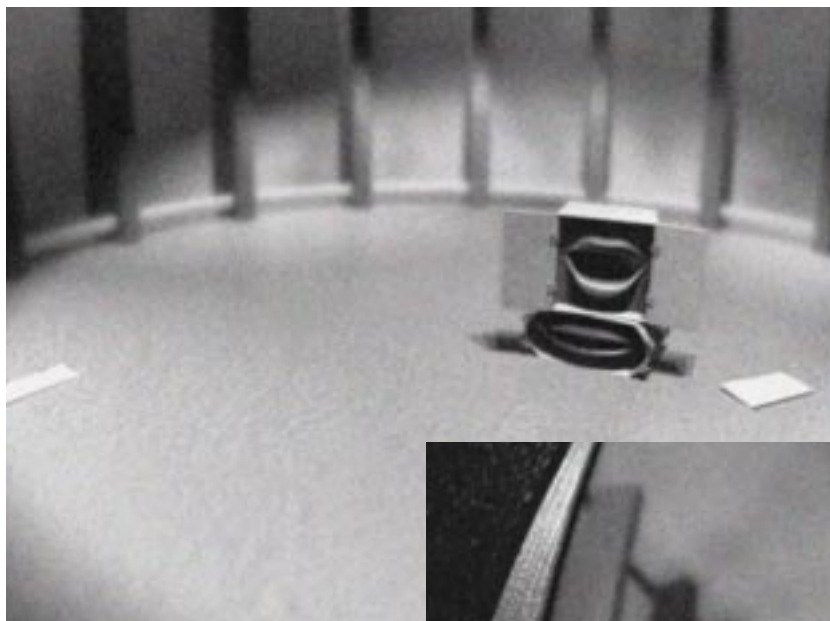
「大きいものを創ることは気持ちがいい。そして大きいものは、感動を鈍らせている大人の心も、その大きさによってアッと思わせ、触発することができる。とにかくまず人を刺激し、芸術に関心を持たせられれば、作品としての第一の役割は達成できる」ともいう茂木くん。具象と抽象の中間的なものを狙ったこの作品は、15年ほど前、大病を患ったときに家にやってきた飼猫への想いをモチーフに、大きく創ることを目指し、2mを超えるものに仕上げたのです。



茂木 隆行くん Motegi Takayuki

岐阜県立加納高校出身 芸術学部美術科彫刻コースを卒業し、現在、大学院芸術工学研究科・芸術文化専攻2年。小・中学校時代に木彫を体験、高校時代には美術科の卒業制作で石を選んだので、大学では別なものをとの思いから学部3年次から鉄を素材として使うようになった。2000年『根源』、2001年『夢の中』、いずれも鉄を素材にした作品で二科展に入選している。

# シュールな笑いを含んだCG映像を



## 『Distrust of Romantica』(幻想を疑う)

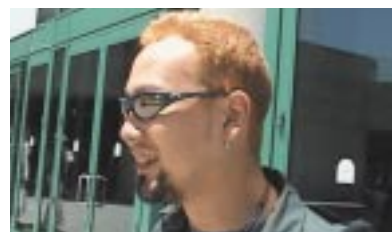
SIGGRAPH 2001  
Electronic Theater 上映作品

この作品は、アメリカコンピュータ学会のコンピュータグラフィックス分科会が毎年開いている世界最大の映像関係見本市「SIGGRAPH」(Special Interest Group on computer GRAPHics of association for computing machinery)のElectronic Theaterで上映されたものです。世界中のCG映像作家が競って出品し、上映されることを望むイベントで、ロサンゼルスで開かれた2001年大会では世界各国から47作品が選ばれました。その一つが、未永さんが太陽企画 株 在籍時代に制作したこの作品です。

未永さんが映像制作に興味を持っ

たのは1980年代、フランスの詩人ランボーが砂漠を彷徨する姿を映像にしたCMに魅せられて以来のこと。このエピソードからもうかがえるように、未永さんの好みはちょっとシュール。この作品も、約2分弱のストーリーのないアニメーションですが、見ている人に「？」と思わせ、どう反応するか、どう解釈するかを眺めて楽しむ、そんな乾いた笑いをねらったものなのだそうです。

入賞後、東京で開かれた「ワールドPCエキスポ」や、ヨーロッパで開かれた「Art Futura」で上映されるなど、評価も高まっています。



未永 仁志さん Suenaga Hitoshi

神奈川県立都岡高校出身。1995年、デザイン工学部情報デザイン学科映像コース卒業。日本の映像分野の製作会社を代表する太陽企画(株)に就職し、CGを使ったCM制作などに携わる。1999年「Vibe Station ID」で田中秀之賞+デザインブレックス賞、2000年「Holland Animation Film Festival 2000」でグランプリなどの受賞を経て、2001年8月フリーに。

## 盛大に開催！オープンキャンパス2

9月15日、16日に本学を会場にオープンキャンパス2を開催しました。各学科・コース毎の企画のほかに、ビジュアルリスト・手塚眞氏を迎えて作品上映と面白いお話、その他さまざまな企画を取り揃え、全学を挙げて開催しました。受験生・高校生を中心に一般の方へも広く開放し、施設拡充をおこなった新研究棟や学生会館等も公開し、この2日間で参加人数は1,142名を数えました。



美術科工芸コースの金箔を使ったパネル制作

## 大学祭、「一期一得」のテーマで開催！

10月6日(土)、7日(日)の2日間にわたり、学生会が主催する「東北芸術工科大学大学祭」が開催されました。この機会にひとつでも多くの事を得ようと「一期一得」をテーマに、学生団体が企画する様々なイベントが展開されました。屋外に特設リングを設け「みちのくプロレス」の試合や、みうらじゅん氏を迎えて長坂一郎助教授との対談等が行われました。



今年も多くの学生企画で賑わいました。

## PopCornプロジェクトがスタート

誰もがIT(情報技術)を活用して豊かな生き方と人々の交流ができる社会の実現を支援する「PopCornワーキンググループ」の開発プロジェクトがスタートしました(代表:前川道博情報デザイン学科講師)。同プロジェクトでは、大学・企業から市民グループ・個人までの多様なメンバーにより、市民参加型ネット

支援システム「TripleCorn」の開発とその実証実験を行います。

ホームページ「PopCornと市民参加型ネット」<http://www.mmdb.net/>

## 保護者会寄附金で設備機器を購入

東北芸術工科大学保護者会(会長:井上憲太郎氏)から、この度、本学に3,000万円の寄附金をいただきました。この寄附金は、保護者会が設立された平成7年から、大学の将来的な厚生施設等の整備拡充に当てる目的で、毎年積み立てられてきたものです。保護者会からは、開学10周年記念学内整備拡充事業に伴う、学生の福利厚生のために備品購入の依頼がありましたので、大学と役員会とで協議し、下記の備品を購入致しました。いずれも高品質で、長期間の使用に耐えられる物を厳選しております。保護者会と会員の皆様方には、心から感謝申し上げます。  
[購入品リスト]

- 学生会館新ラウンジ/テーブル、椅子
- 学生会館新個室食堂/テーブル、椅子等
- 学生会館パティオ/ソファ、サイドテーブル、スツール等
- 学生会館セミナールーム/スタッキングチェア、テーブル、ホワイトボード、レクチャースタンド、プロジェクトワゴン等
- 学生会館クラブ共同ボックス/鍵付き大型キャビネット、大型棚、フレックスボード、ウォールボード等
- 学生会館和室/テーブル、座卓、座布団等
- 学生会館喫煙室/灰皿、ベンチ
- 学生会館購買部・コピーセンター/各種什器類、会議用テーブル、椅子等
- 体育館/学生用電子キー付きロッカー

## 市街地に「動く環境アート」

本学と山形県・山形市で組織する環境アート推進協議会では、本年度の事業として、市街地中心部を循環する100円循環バスの「動く環境アート」化を実施します。現在の100円循環バスの外観を、市街地の景観に合うようにデザインを施します。協議会で選考した作家・フェデリコ・フェレロ氏(コスタリカ在住)が、山形の風土や文化に触れて、バスのデザインに反映させる予定です。フェデリコ・フェレロ氏は、10月11日に来日し、本学に約1ヶ月間滞ります。新たなデザインを施され、生まれ変わったアートバスは12月1日から運行開始予定です。

## 学生の活躍

### 「紙わざ大賞」で奨励賞を受賞

第11回「紙わざ大賞」(審査員/福田繁雄・中原佑介)で渡部雅弘君(大学院2年・ビジュアルコミュニケーションデザイン)がゼミで制作した作品が奨励賞を受賞しました。

### 「日本クラフト展」に入選

酒井崇全君(大学院2年・工芸)と小山泰之君(工芸4年)が結成した共同制作ユニット「SOブラザーズ」の作品『わん』、齋藤寛達君(大学院1年・工芸)の作品『Yamanami』、下山普行君(工芸4年)の作品『ふうけい』が日本クラフト展に入選しました。作品は下記日程で展示されます。

11月15日(木)~21日(水) 阪急大阪  
2月22日(金)~25日(月) 大丸福岡天神

### 工芸都市高岡クラフトコンペに入選

富山県で開催された「工芸都市高岡2001クラフトコンペ」で、酒井崇全君(大学院2年・工芸)の作品「奏」と齋藤寛達君(大学院1年・工芸)の作品「よせぎ箱(あか・みどり)」、小山泰之君(工芸4年)の作品「膳-彩-」が入選しました。作品は10月25日(木)から30日(火)まで大和高岡店(富山県)に展示されます。

### 再興第86回院展に入選

再興第86回院展に中井香奈子さん(大学院2年)、早川貴子さん(大学院1年)、鬼塚堅太くん(3年)、高田裕子さん(卒業生)、阿良山早苗さん(卒業生)の5名が入選しました。作品は10月11日から10月28日まで山形美術館に展示されます。

### えんため大賞優秀賞受賞

株式会社エンターブレインが主催する「第3回えんため大賞」コミック部門で、千田悟史君(グラフィック3年)の初投稿作品「雪のマフ」が優秀賞を受賞しました。千田君の受賞作品は「コミックビーム9月号」に掲載されました。

### アジアデザインコンペで協賛企業賞を受賞

京都造形芸術大学、京都芸術デザイン専門学校が主催する「21世紀アジアデザインコンペ」において、武士祐介君(大学院2年・ビジュアルコミュニケーションデザイン)の作品『(キュウ)』が協賛企業賞を受賞しました。

### 空手道部が山形県大会で大健闘

9月23日に置賜生涯学習プラザを会場に開催された山形県空手道選手権大会において、近藤康亮君(情報デザイン学科2年)が一般男子個人組手有級の部において優勝、

三瓶豊君(情報デザイン学科1年)が第3位、有段の部では室岡利明君(情報デザイン学科1年)が第3位に入賞しました。さらに男子団体戦では第3位入賞と大健闘を見せました。

#### 東北建築学生賞で最優秀賞を受賞

第5回JIA東北建築学生賞の公開審査が、9月29日に仙台市で行われ、羽鳥光弘君(環境デザイン学科4年)が最優秀賞を受賞しました。表彰式は11月9日(金)に文翔館で行われ、11月7日(水)から11日(日)まで山形県民会館を会場に応募作品の展示会が行われます。

#### O-CHAスタイルコンテストで優秀賞

静岡市で行われた「世界お茶まつり 静岡」の「O-CHAスタイルコンテスト」でSOブラザーズ(酒井崇全・小山泰之)の作品『想』が優秀賞を受賞しました。作品は「世界お茶まつり静岡 新しいO-CHAスタイル展」で展示されました。  
SOブラザーズ <http://sobrothers.tripod.co.jp/>  
O-CHA NET(<http://www.o-cha.net>)

#### 新制作展に入選

白崎由紀さんと鈴木真理子さん(生産デザイン学科3年)の共同作品「シザーズ・メカニズムによる表皮構造PP-CLAY」が、第65回新制作展で初出品初入選しました。合成樹脂を組み合わせた筒状の物体が自在に形を変えるユニークな作品です。入選作品は、10月23日から11月1日まで岡崎公園・京都市美術館で展示をします。

#### 教員の活動

##### [執筆]

小沢明教授「コーズハウス(コーズ社本社ビル) 新建築/新建築社」  
竹内昌義助教授「都市を遊動する情報空間」コンフォルト#50/建築資料研究社  
山畑信博助教授「イーエスコウ城」住宅金融月報6月号/住宅金融公庫  
太田和彦教授「エッセイ」ラッキー酒場 雑誌「室内」8月号、「川島雄三と水谷龍二」雑誌『悲劇喜劇』9月号、書評「久住昌之」小説中華そば「江ぐち」7/15、書評「吉川潮著」本牧亭の鷹」9/15 河北新報/河北新報社  
斎賀和彦講師「J-Photographers(韓国)」(<http://www.j-photographers.com/>)「Adobe Premiere 6実践講座」表紙デザイン/玄光社、「SHIBUYAインターネット放送局最前線」季刊PasoVi 005号/玄光社  
千葉一幹助教授「クリニック・クリティク」第17回「帰依と幻滅」文藝春秋7月号/文藝春秋  
内藤正敏教授「死から生の輝きを見る東

北文化と思想」禅と念仏8号/禅と念仏社、「落語に隠された悪のトボス」旅の文化研究所編『落語にみる江戸の「悪」文化』/河出書房新社

菊地和博助教授「Look for 伝承文化合同公演と地域づくり」季刊『音楽文化創造』/(財)音楽文化創造、連載記事「民俗伝承の水脈9」庄内地方のモリ供養  
10/6 朝日新聞(山形版)/朝日新聞社、論文「民俗文化伝承活動と地域社会」  
10/20 地域社会研究/地域社会研究会

##### [作品発表]

山田修司教授「独立美術協会展」10/17~10/31 東京都立美術館  
木原正徳助教授「木原正徳個展」10/16~10/28 ガレリア青蔵(東京 西荻窪)  
若月公平助教授「久世光彦氏執筆ページの装画」週刊新潮 3週間に1回/新潮社、単行本「早すぎる夜の訪れ(ケイ・ジャミソン著)」の装幀/新潮社  
金子透講師「Designer's Jewellery展」10/1~10/6 AC,GALLERY(銀座)「OUTLINE EXHIBITION」8/3~10/10 GALLERY FLOW(LONDON)

降旗英史教授「新制作展」9/19~10/3 東京都美術館/新制作協会  
鈴木敏彦助教授「家具と建築を行き来するアルミ」建築家・鈴木敏彦のアルミの仕事」インテリア・マガジンConfort(コンフォルト)/建築資料研究社  
温井亨助教授「生活・生業の場としての歴史的風景保全の研究史に関する考察」ランドスケープ研究第64号第5号/日本造園学会

斎賀和彦講師「日中韓デジタルアートの現在」展に作品出展 9/19~9/22 幕張メッセ「WORLD PC EXPO」併催  
内藤正敏教授「鬼を神に変換させる祭 黒石寺蘇民祭の鬼子」9/30 国際比較神話学シンポジウム(名古屋大学)/比較神話学研究組織GRMC

##### [出版]

竹内昌義助教授「団地再生計画みかんぐみのリノベーションカタログ」9/20/INAX出版  
太田和彦教授「ニッポン居酒屋放浪記・疾風嵐」新潮文庫/太田和彦著・解説/川上弘美」新潮社  
久保田力教授「佛教をいかに学ぶか 佛教研究の方法論的反省(共著)」平楽寺書店

学生・教員の活動については随時、本学ホームページに更新していますのでご覧ください。

#### 美術史・文化財保存修復学科設立記念シンポジウム「美のすがた・美をまもる」

平成13年4月から、芸術学科は美術史・文化財保存修復学科として新たなスタートを切りました。本学科は美術作品の理解と保存・継承を教育目標に据えた全国でも例を見ない学科であり、新たな試みと挑戦が始まりました。この設立を記念して公開シンポジウム「美のすがた・美をまもる」を開催します。

日時 10月27日(土) 13:30~17:00

内容 美術史・文化財保存修復学科の主旨、記念講演『美のすがた・美をまもる』渡辺明義氏(独立行政法人文化財研究所理事) 本学大学院生等による研究発表(西洋美術史・日本美術史・古典彫刻修復・保存科学分野) 渡辺氏と本学教授陣によるパネルディスカッション

場所 本館410講義室 入場無料

お申し込みは美術史・文化財保存修復学科まで。

FAX 023-627-2083

E-mail: [ahc@aga.tuad.ac.jp](mailto:ahc@aga.tuad.ac.jp)

<http://www.aga.tuad.ac.jp/art/index-j.html>

#### 公開イブニング講座「発想の六面体」

本学教授陣が『発想』にまつわる話題をそれぞれの専門の立場で、「実際に経験・体験した話」、「研究や創作活動中の裏話」、「その時どんな発想があったのか」など、研究・創作の実体験に基づいてお話をします。当講座は開催中のため、第3回からのご案内となります。

隔週水曜日全6回/募集定員100名

受講料 1講座1,500円

場所 本館201講義室

講座内容 時間は18:30~20:10)

10月31日『日本画制作のための造形と発想』番場三雄(美術科講師)

11月14日『デジタル映像時代の発想』斎賀和彦(情報デザイン学科講師)

11月28日『発想と偶然』田島正樹(教養部教授)

12月12日『デザイン発想の視点いろいろ』芋阪崇二(生産デザイン学科教授)

全6回のうち4回以上ご出席の方に、受講修了証を発行いたします。

イブニング講座は、第13回全国生涯学習フェスティバル「まなびピア山形2001」に協賛しています。

お申し込みはエクステンション担当まで。

TEL. 023-627-2091/FAX 023-627-2154

E-mail: [ext@aga.tuad.ac.jp](mailto:ext@aga.tuad.ac.jp)

## 鶴岡市でイブニング講座「色の話」を開催

昨年に引き続き、致道博物館 鶴岡市と本学との共催により、公開イブニング講座「色の話」を鶴岡市で開催します。本学の教員が各専門分野の視点で「色」についてヴィジュアルに楽しくお話しします。

講座内容 時間は18:30～20:00)

第1回 11月15日『色との対話』

講師:山田修市(美術科教授)

会場:鶴岡地域職業訓練センター

第2回 11月20日『建築のモダニズムと色』

講師:元倉眞琴(環境デザイン学科教授)

会場:鶴岡地域職業訓練センター

第3回 11月29日『縄文・弥生の土器の色』

講師:北野博司(歴史遺産助教授)

会場:鶴岡地域職業訓練センター

お問い合わせ・お申し込み

財団法人致道博物館

〒990-0036 鶴岡市家中新町10-18

TEL. 0235-22-1199 / FAX 0235-22-3531

## 秋の芸術学講座のご案内

東西美術紀行～西洋篇～

講演テーマは明治のはじめに大蔵省御用達の版画家として活躍したイタリア人キヨソーネについてです。版画作品だけでなく紙幣や切手の印刷を通して文明開化の日本に忘れられない刻印を残した彼の生涯を、スライドをまじえながら紹介します。

日時 11月10日(土)14:00～16:00

場所 本館207講義室

講師 リア・ベレッタ(元ニューヨーク・イタリア文化会館館長) 日本語で講演

受講料 一般1,000円(学生無料)

芸術学講座～美術館の成り立ちと所蔵作品～  
2部構成による講座。第1部はブリヂストン美術館とパウル・クレーの「島」、第2部では大原美術館とエル・グレコの「受胎告知」についてお話しします。

日時 11月15日(木)18:00～20:30(途中10分間の休憩あり)

場所 本館208講義室

講師 坂本恭子(ブリヂストン美術館学芸員) 黒住浩子(大原美術館学芸員) 安發和彰(美術史・文化財保存修復学科助教授)

受講料 一般1,000円(学生無料)

お申し込みはエクステンション担当まで。

TEL.023-627-2091 / FAX 023-627-2154

E-mail: ext@aga.tuad.ac.jp

## 22世紀のグランドデザインIII 「01!もう一つのデジタル未来学」

本講座は、遊学館・山形県生涯学習文化財団に共催いただき、本学大学院講義を開放するものです。竹村真一助教授がコーディネーターを務め、毎回、様々なジャンルのトッパンナーを特別講師として招聘します。

講座内容 時間は17:30～20:00)

10月9日『総論』竹村真一(文化人類学者)

10月16日『生命にとってコミュニケーションとはなにか』三輪敬之(早稲田大学教授)

10月30日『身体からの発想』八谷和彦(メディアアーティスト、ポストペット開発者)

11月13日『流体都市～デザインを超えるデザインの思想』渡辺誠(建築家)

11月27日『人とロボットの共生進化』松井龍哉(ロボットデザイナー)

12月11日『グローバルヴィレッジと文化の多様性』今福龍太(文化人類学者)

場所 本館201講義室

受講修了証

全課程修了後、5回以上受講された方には受講修了証を授与します。

受講料 6回通し4,000円

お電話又は、住所、氏名、電話番号を明記の上、FAX又はE-mailでお申し込みください。受講料はコンビニ払込もしくは郵便振替でご納入ください。払込・振替用紙はご連絡後お送りいたします。

お問い合わせ・お申し込みは研究課まで。

TEL. 023-627-2181 / FAX 023-627-2185

E-mail: inkouza@aga.tuad.ac.jp

## 環境デザイン公開講座「環境的未来型」

環境デザイン学科が企画・運営し、建築設計・都市計画分野の第一線で活躍している方々を講師に招き、環境デザイン公開講座「環境的未来型」を開催します。

講義内容 時間は18:00～20:00)

10月26日『サウンドスケープ・その思想と実践』鳥越けい子

11月29日『21Cの建築』伊東豊雄

12月13日『街は要りますか?』蓑原敬

お申し込みはエクステンション担当まで。

TEL. 023-627-2091 / FAX 023-627-2154

E-mail: ext@aga.tuad.ac.jp

## 東北文化研究センター「秋の講座」

東北文化研究センターでは「秋の講座」東北からの思想3『発見する東北人』を開催します。東北の風土が阿部徳次郎、高橋竹山、石

ノ森章太郎の作品にどのような影響を与えたのか、彼らの知られざる側面と、彼らを育んだ東北の豊かな風土と精神を再発見する旅にご案内します。

講座内容(時間は18:00～19:30)

10月16日『評伝・阿部徳次郎(山形県出身)』高橋義夫(直木賞作家)

11月13日『初代・高橋竹山(青森県出身)』松林拓司(東奥日報社会部記者)

12月11日『石ノ森章太郎(宮城県出身)の世界』森繁毅(東北文化研究センター助教授)

受講料(お支払いは当日受付にて)

3回通し 3,000円(友の会会員2,000円)

1回のみ 1,200円(友の会会員700円)

お問い合わせ・お申し込みは東北文化研究センターまで。

TEL. 023-627-2168 / FAX 023-627-2155

E-mail: tobunken@aga.tuad.ac.jp

## 「デザイン選手権」12チームが決勝大会へ!

「明日の社会・明日の暮らしをデザインする」をテーマに繰り広げられる「第8回全国高等学校デザイン選手権決勝大会」を10月28日(日)に開催します。全50校213チームの応募の中から、一次審査を通過した入賞12チームが本学でプレゼンテーションを行います。

決勝大会出場チーム

雄物川高等学校(秋田県) 新庄工業高等学校(山形県) 米沢工業高等学校(山形県) 筑波大学附属坂戸高等学校(埼玉県) 八日市南高等学校(滋賀県) 扇町総合高等学校(大阪府) 大阪市立工芸高等学校(大阪府) 神戸工業高等学校(兵庫県) 今治工業高等学校(愛媛県) 有田工業高等学校(佐賀県) 日出陽谷高等学校(大分県) 開邦高等学校(沖縄県)

10月28日(日)12:30～本学201講義室

入場無料/お問い合わせは大会事務局まで。

TEL. 023-634-1010

<http://www.tuad.ac.jp/hiddenchamp/>

## 学年暦(11～1月)

11/25 自己推薦入学試験

12/18 集中講義期間(～12/21)

12/25 冬季休業(～1/6)

1/7 授業再開

《お詫び》前号の当ページにおいて、エクステンション担当の電話番号が間違っていました。大変ご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。

「外へ飛び出せ」がTUADのモットーです。授業での体験を積み重ねる学生は、学内のサークル活動も、学外の一般活動への参加も積極的に飛び込んでいます。その体験談をお聞きましょう。

### Message 1

#### 「和太鼓部」から

開学10周年記念日のデビューでは「屋台囃」「木遣り」などを演奏。



日高 晃作くん  
芸術学部芸術学科  
美術史美術保存コース2年  
(岡山県・岡山芳泉高校出身)

和太鼓部は、平成13年4月からスタートしたばかりの部です。入学式の日のお祝いアトラクションで姉妹校である京都造形芸術大学の学生による和太鼓が披露され、それに感激して入部を決めたという1年生を含めて、部員は10名。その時に使われた大太鼓1台、桶胴2台、長胴8台、締め太鼓8台が、そのまま部の楽器となっています。10月2日の開学10周年記念式典のレセプションで、初めて『創』『勇駒』などの演奏を披露しました。

和太鼓は、音を聞かせるだけでなく、体全体で表現して魅せる部分もあります。またそれによって、音の響きも変わってきます。曲によっては、腕が上がらなくなり、足も震え、最後は顔まで引きつってしまうほど、追い込まれることがあるけれど、それでも打ち続けられるのは一緒に練習してきた仲間がいるからなのでしょうね。そのとき初めて得られる一体感や解放感のようなものは、和太鼓の醍醐味だと思っています。

僕は、美術の保存・修復の仕事をめざして今のコースを選んだのですが、いまは、音と楽器の保存・復元にも興味が広がってきました。そして、好きなクラシックギターから、弦楽器の延長で、興味はさらに琵琶、三味線、三線などの日本楽器へ、そして和太鼓へと広がったわけです。それらを演奏してみて気づいたのですが、ギターは独奏ですが、和太鼓は合奏の楽しさなんです。たとえば50%は練習でおぼえたもので演奏しますが、残りの50%は掛け合いというか、一人が叩いたことに呼応して叩いていき、コミュニケーションでつくりあげていくんです。楽器によるそのような違いというか、音と楽器の文化というか、そんなことまで和太鼓をとおして深めてみようかなと思っています。



### Message 2

#### 「木匠塾」から

奥羽山脈の麓、五十沢地区の茅葺き屋根の家に魅せられて。



(写真左から)  
中村 明日香さん  
デザイン工学部  
環境デザイン学科4年  
(宮城県・泉館山高校出身)  
根本 真理さん  
大学院芸術工学研究科  
芸術文化専攻1年  
(宮城県・仙台白百合学園高校出身)

地域の人々と生活を共にする中で、木を植え森を育て、木造建築について考えるという「木匠塾」の活動は、1991年、岐阜県高根村で関東の大学のゼミ合宿から始まりました。やがて岐阜県加子母村、奈良県川上村、秋田県角館町での活動へと広がり、2000年から東北芸術工科大学の学生による山形県村山市五十沢地区の活動が加わりました。デザイン工学部の学生を中心に28名が、活動に携っています。

村山市五十沢地区での活動は、数年前からデザイン工学部の温井亨助教授が「建築、町づくり、風景の保全を考える」ゼミの一環として続けてきたものですが、昨年からは「木匠塾」として活動するようになり、今年から大学の公認サークルとなりました。

私たちは月2回、日帰りで行き、夏休みには1週間泊まり込んで、生活を共にします。夏には下草刈り、秋から冬にはそば刈り、そば打ち、茅刈りなど、季節ごとの作業を手伝います。炭焼きを手伝い、炭を入れる袋のデザインをして去年は大学祭で販売しました。

この五十沢地区には、集落の8割の民家が茅葺き屋根のまま残っています。秋には皆で茅を刈り、春に少しずつ補修をしていますが、屋根葺き職人が少なくなりました。現在、茅葺き屋根を維持するにも大変な労力と費用がかかるため、簡単に「残そう」とは言えない状態なのです。では、日本の伝統的住まいをどうすれば守れるのか。将来、自らが茅葺き家に住み、「当事者」になることで答えを見つけていこうと考えているメンバーもいます。この活動の中で私たちは、「住みて」の視点に立った考え方を身につけているような気がします。



第1集所収 高台寺時雨亭。千利休好みと伝えられるものであり、数寄屋造りの起源を示す「山里の庵」の姿を持ったものなので第1集に入れた、と「はしがき」に記されている。



第3集所収 小堀遠州好みの大徳寺孤篷庵



TUAD



クローズアップ

研究室にも図書館にもあふれるお宝たち ③

千歳栄氏(株式会社千歳建設社長)寄贈・東北芸術工科大学図書館所蔵

## 堀口捨己監修・中村昌生ほか共著『茶室おこし絵図集』(墨水書房刊・全12集)

始まりは明確ではないが、江戸時代には茶道も広く諸藩に広がり、同時に《茶室おこし絵図》が盛んに造られるようになったという。台紙に平面図を描き、それに立面(壁面)を描いた図を折り畳んで貼りつけ、組み立てることができるようにしたものであり、茶室の記録や建築に活用された。

昭和38年、松平定信、一橋徳川などが収集し伝えてきた絵図を復刻したのが、本書である。監修をした堀口捨己氏(1895～1984)は、東京帝国大学建築学科に学び、日本および東洋の建築史・美術史学を拓いた伊東忠太氏(山形県米沢市生まれ/1867～1954年)らに師事。昭和28年には『桂離宮』によって毎日出版文化賞を受賞していた、日本建築の研究と設計の第一人者であった。堀口氏は、この絵図復刻にあたって、当時、日本建築の研究者としては新進気鋭の中村昌生氏(1927～/京都工芸繊維大学名誉教授、京都伝統建築技術協会理事長)たちに目をつけた。そして、この編集チームは、永久保存できるように紙

漉きに糊を使わず、それでいて何度組み立てても破損しない腰の強い紙を特注するなど6年の歳月をかけ、全12集、50点を収めた絵図集を完成させた。珠光、紹鴎に始まり、千利休から千小庵、千宗旦へ、また古田織部、織田有楽を経て小堀遠州へとつづく中で“華美”と“寂び”の間を振幅しながら“侘び”の基本形がつくられてきたともいわれる茶室の歴史が一望できるものとなったのだ。

千歳建設(山形市本社)代表の千歳栄氏が、この絵図集と出会ったのは東京神田の古書店。日本建築の基本である数寄屋造りへの関心を深め、各地の数寄屋造り建築を見て歩き、研究書を渉猟していた頃のこと。江戸時代、紅花などを移し京の文化を取り入れてきた山形県に、京文化を代表する数寄屋造り建築の技術を根づかせたいとの強い想いから、懇願して譲り受けたという。その後、千歳氏は仕事の場で中村氏と出会い、もみじ公園清風荘茶室・宝紅庵(1981年/山形市)若者定住促進セン

ター茶室・五山草廬(1988年/長井市)チェリーランド茶室・臨川亭(1994年/寒河江市)など、山形県内の茶室の建築に設計者と施工者としてかわり交わりを深めた。

全巻揃った絵図集は、大学では本学のほかに東京芸術大学、金沢美術工芸大学、日本大学芸術学部など8つの図書館にしか所蔵されていない希少本であるが、茶室の歴史を知り、その構造を見る資料としてだけでなく、伊東忠太～堀口捨己～中村昌生～千歳栄とつながる伝統的日本建築に関する不思議な縁を秘めた資料ともなっている。



平成13年8月、全50点を組み立てて展示した日復刻に携わった著者の一人である中村昌生氏(左)が千歳氏(右)とともに本学を訪れ、40年前の作品を懐かしんだ。

発行

学校法人東北芸術工科大学

〒990-9530 山形市上桜田200 東北芸術工科大学広報課 TEL.023-627-2095 FAX 023-627-2154

[ホームページアドレス] <http://www.tuad.ac.jp> [E-mail] [general@tuad.ac.jp](mailto:general@tuad.ac.jp)